

二十世紀精神病院

立木鷹志

下意識界への旅のごと 紆曲り^{くねくね} 紆曲れる^{くねくね} 螺旋迷路の階

段を 孤独の靴音響かせ下りて、地獄の冥府めく地下壕、

岩崩の楽音降り頻く^{カクコム} 痛に 獨り身を置く。其處は 音

靈の招し誘ふ^{ロクク} 岩音の樂屋。煙草脂凍る^{ヤニ} 漆黒の^{コンクリート} 混泥土壁に

囲まれし 狹隘なる空間に、俺は 蠅ほどの飛翔すら為得

ぬ肉体を置き、瑠璃色に広がる天空の彼方を夢む。裸電

球^{とも} 儚く^{とも} 點る 其處は—— 二十世紀精神病院。透明な

ガラス玉の眼球を^{うつろ} 空虚に開らき、日常なる幻影に腐れ切

った^{ゆす} 脳髓揺り、救世主を待ち侘びる乞丐の^{ささくれ} 蓬起^{ささくれ} 立った

膝頭を振わせて 病者どもは 口々に^{ささくれ} 吠いてゐる。

俺^{ダー・グイン} とは誰か？ 何處より来たり、何方へか去る？

俺の^{イフヒ} 仮面を剥いだ下より^{ダスマン} 露頭する 世間^{ダスマン} の馬鹿

面。)

(俺^{ダー・グイン} の存在の意味は…… 住人の^{あるじ} 失踪した部屋の

ように 空虚、記憶喪失者の故郷のように…… 不明。

——意味なき存在。)

（『明日なき行進——墓碑銘』）

生存の無意味に倦じた精神は、眼に生暖き水液を湛え、徐ろに煙草煙らせ、舌に冷たき珈琲啜る。冷め切った暗褐色の液体を、味わうでもなく流し込みつゝ、精神は遙か、気疎き生存の反覆を、感慨もなく思い返す。

……夜毎、孤獨の夕餉、狐貉の如き影落し、唯、味気なく飯啖う荒涼たる寂寞に、思わずも雑踏に歩み出で、陋巷を彷徨す。酒場にて出逢ひたる幼気なき少女を、狭陋しき部屋で抱擁けど、歓楽とてなし。

（唯、其處に偶然、そのように存在せしめられたと言う事実だけで、恬然と自己を主張し続ける愚劣さ。俺は、寧ろ、理由なき偶然の生存より、理由ある滅亡を肯定する。）

（『最善は生まれないこと、次善は即時死ぬこと』——だが、その自殺をするための理由は——不明。）

鷗月某日、縊り逝去しXの三回忌。雷神の稲妻の鉄より猶固き金石契を、故郷の許嫁の掌に残せしまゝ、いつしか都会の徒女と暮し始めたXの言葉。「愛する技術は専制国家の暴君に倣えばよい。ひとりの女のために、他の悉くを抹殺することだから。言わば観念的大量殺戮。」

師走の朔風吹き遊ぶ 盤樓アバートの寒室で、襟巻のよ
うに電気コードを首に巻いて縊死したXを、（意志薄弱）
と囁く厚顔無知な（グスマン）人間 ∇ ども。

（「あれか——これか」 Aか——Bか？……その選
択は投企の根拠に存在する偶然性。）

（ \wedge 愛 ∇ とは、そも其處に溟滓（くぐも）れる優美や価値を、己
れ痛かに見出し得たと錯誤する 或る種の妄想だろう
ぜ。……俺の心臓にある冷やかな \wedge 悲哀 ∇ ）

地下の筈窟（カクコム）を後に、再び 夜の街衢を彷徨う俺の精神
に、靄霧（ネオン・サイン）しき巷燈の光微粒子の波と共に ひたくと打
ち寄せる \wedge 悲哀 ∇ 。〃一〇〇〇億光年の彼方[〃]から、突
如 訪れる \wedge 神秘的啓示 ∇ を翹望しつつ、俺は 歩く。
九天の奥津城の魔女の蠱誘でも、地獄の番犬（ケルベロス）の招誘でも、
いっこうに構いはしない。この無意味な \wedge 世界 ∇ に、宝
玉を鑲めるように赫突たる意味を賦与し得る 錬金術的
奇蹟ですらあるならば。

（あらゆる謀反人の霊主たる 大王リュシフェよ、余
の眼前に来らしめ、全ての神秘に解答を与えしめ給え
シオーリリノ）